

# 千刈狸の呟き

もう20年以上前になるが、仔狸が社会狸として始めて修行して大親分と知り合いました。直接外科一族を仕切っていたのは親分ですが、病院全体を取り仕切る大親分は外科一族の大親分でもありました。当時は病院全体のとりまとめもあり、直接大親分の技を見る機会は少なかったものの、週にいちどだけ大親分が執刀するのを拝見する機会がありました。外科狸として腕を存分に振っていた頃のことは残念ながら知らないのですが、週にいちどの手術（全身麻酔のものもあれば局所麻酔のすぐ終わるものもありますが）は、大親分にとってはとても大切なひと時だったような気がします。1年目の研修狸として何もできないときにも、助手として鉤をひいたときにはいろいろなことを教えてもらったりやらせてもらったり・・・（時々、助手をしているときに「〇〇ここからやれ～」のようなフリが来ることもありました。）研修狸の間では、大親分との手術の時に何をさせてもらったという話で盛り上がっていた記憶もあります。研修狸たちにいろいろなことをさせることができるのも、もし何かがあっても問題なく修復できる技量があるからだろうと思います。

大親分は外科狸としてすごいばかりではなく、狸としても尊敬するところがたくさんありました。狸病院の関係のある患狸が入院となったときには夜中でも病棟に来て患狸にひと声かけてくれます。夜中に具合が悪くて受診して、研修狸たちが寄ってたかって点滴をしたり、鼻から管を入れたり・・・（患狸はとても不安なことでしょう）。そしてやっと病棟でほっとしたところに顔見知りの大親分が、「大丈夫だから、お大事にしてください」と声をかけてくれる・・・患狸はどれほど安心したことでしょうか。外科としてすごい技を持っていることはもちろん凄いことですが、この病院を頼ってしてくれる狸に対する心づかいがあり、入院時に大親分がひと声かけてくれることによって患狸の不安な気持ちが和らぎ、未熟な研修狸の言葉にも耳を傾けてもらえるようになっていたのだと思うと、完璧な連係プレーであり、研修狸の私としては感謝のしようがありませんでした。

大親分はもちろん優しいだけではありません。

## ～ 狸の大親分 ～

### 仔 狸

社会に出る狸としての最低限の礼儀にはとても厳しかったと思います。特に研修狸たちは当時外科でも7～8匹いて、学生気分の抜けない状態であったりしていたので、いろいろなことに気が付かないことも多かったと思います。自分が主役となる歓送迎会や大学その他の公式行事、学会や研究会の発表の時にはネクタイをしてスーツを着用しないと注意を受けます。また、当直明けでそのまま回診にでた時に、術衣に白衣を羽織った格好で参加すると着替えてくるように言われました。当時の当直も夜寝られないことが多かったので、いくら若かったとはいえ翌日はぼーっとしがちですが、朝にはきちんと顔を洗って着替えをして、だらしない格好で日中の診療に出ないようにということだったと思います。今でこそスクラブに白衣というのが通常の格好ですが、当時では考えられなかったスタイルだったと思います。

仔狸が研修を終え、大学病院からほかの病院へと異動してゆきましたが、行く先々の病院には大親分の弟子たちがいて、大親分の教えがそれぞれの病院で引き継がれていました。兄弟子たちの病院へ異動しても、居心地よく過ごせたのはみんな大親分の弟子なんだという安心感だったのだと思います。

大親分には謝らなければならないことがふたつありました。一つは、研修狸のころに、週にいちどの手術日に私が助手に入るとき、私がいちも張り切って手洗いをしていたのか、大親分は手術を私に譲って助手をしてくださいました。普段の管理職業務の中の週いちのリフレッシュできる機会を取ってしまったのでは・・・と、ずっと気にしていました。（特に同僚狸たちからは、大親分の手術を奪った研修狸とからかわれていましたが・・・）

もう一つは、修行を積んで一狸前の外科狸になって戻ってきますと研修を終えるときに言ったのに、なかなか一狸前になれず、大親分が在職中に戻ってこれることができなかったことです。

大親分の弟子たちがそれぞれの場所で大親分として後輩たちを鍛えて、大親分の教えがいつまでも傳承されてくれれば良いと思います（合掌）。